

## C.S.ルイスの人種観

—Prince Caspian を中心に—

中嶋 千秋

日本大学大学院総合社会情報研究科

## C.S. Lewis' View towards Races

NAKAJIMA Chiaki

Nihon University, Graduate School of Social and Cultural Studies

---

*The Chronicles of Narnia* (1950-1956), written by C.S. Lewis (1897-1963), have been very popular among children all over the world for more than 60 years. One of the major features of the series is the presence of Non-Human Characters. Their actions, especially their speech, indicate the thoughts Lewis intended to convey to the children. In this article, dwarfs of *the Chronicles of Narnia*, mainly from the fourth book of the chronicle, *Prince Caspian* (1951), are analyzed through their actions in order to clarify Lewis' views against racial discrimination.

---

### 1. はじめに

C.S.ルイス(Clive Staples Lewis, 1898-1963)は現在の北アイルランド・ベルファスト出身の作家、文学史家、キリスト教弁証家である<sup>1</sup>。『ナルニア国年代記物語』(*The Chronicles of Narnia*, 1950-56)は彼の代表作のひとつであり唯一の児童向けファンタジー作品である。『ナルニア国年代記物語』は47言語に翻訳され<sup>2</sup>、現在もシリーズ映画が作成中であり<sup>3</sup>、出版後60年を経て今なお世界中の子ども達に愛されている。本邦でも1966年に瀬田貞二訳で岩波書店

より出版されて以来、現在まで版を重ねている<sup>4</sup>。

『ナルニア国年代記物語』は別世界物語である。具体的には20世紀初頭～中盤のイギリスに設定された現実世界と、〈ナルニア〉<sup>5</sup>と呼ばれる別世界とがパラレルワールドになっている。主に現実世界の少年少女たちが様々なきっかけでナルニア世界に入り込み、そして再び現実世界に戻ってくる〈行きて帰りし物語〉が基本となっている。ナルニア世界には多数のNon-Human Charactersが生息しており、彼らの存在が『ナルニア』を魅力的にしている理由のひとつだと筆者は考える。

では、Non-Human Charactersとはどのような生き物であろうか。まず、ナルニア世界の住人は4つのカテゴリーに分類できる。すなわち

- ・人間
- ・通常の動植物

---

<sup>1</sup> 山形和美「C.S.ルイス一人と作品」山形和美、竹野一雄編『C.S.ルイス『ナルニア国年代記』読本』(増補改訂版、国研出版、1985年)

<sup>2</sup> GoodKnight, Glen H., *Narnia Translations* (Narnia Editions and Translations)

〈[http://inklingsfocus.com/translation\\_index.html](http://inklingsfocus.com/translation_index.html)〉(2014年12月12日閲覧)

<sup>3</sup> DAVID MAGEE TO WRITE THE FOURTH NARNIA FILM: THE CHRONICLES OF NARNIA: THE SILVER CHAIR FOR THE MARK GORDON COMPANY AND THE C.S. LEWIS COMPANY (The Chronicles of Narnia Official Website)

〈<https://www.narnia.com/uk/news-extras/narnia-news/>〉(2014年12月12日閲覧)

---

<sup>4</sup> 本稿での『ナルニア国年代記物語』内の固有名詞の日本語表記は瀬田貞二訳に準ずるが、一部異なるものがある。

<sup>5</sup> 本稿での〈ナルニア〉表記は、『ナルニア』は『ナルニア国年代記物語』を指し、この作品に登場する別世界を〈ナルニア世界〉、ナルニア世界にある国名を〈ナルニア国〉とする。

- ・ものいうけもの (Talking Beasts)
- ・神話・想像上の生き物 (魔女、フォーン、バックス、ニンフ、ドワーフ、巨人など)

である。その内、人間以外の3種、〈通常の動植物〉、〈ものいうけもの〉、〈神話・想像上の生き物〉を Non-Human Characters (以下 NHC と記す) と定義する。

NHC は物語に大きく関わり、作品世界を豊かに、且つ唯一無二のものにしているが、本稿ではルイスの人種観が、NHC を通してどのように露呈しているかを検証することとしたい。

## 2. ルイスと人種観

### 2.1 ルイスを巡る人種差別議論

『ライラの冒険』(*His Dark Materials*, 1995-2009) 三部作で知られるイギリスのファンタジー作家のプルマン(Philip Pullman, 1946-)が、『ナルニア』に人種差別や性差別的な表現があると痛烈に批判した記事がイギリスのガーディアン紙に掲載されたのが 1998 年のことである<sup>6</sup>。プルマンは、『ナルニア』を「露骨なまでに人種差別的」<sup>7</sup>と激しく批判した。また、インディペンデント紙にも同様に、『ナルニア』を初めとする一連のルイスの作品が偏狭だとする批判が掲載された<sup>8</sup>。一方、そのような議論に対して反論したのがアズベリー大学の英文学教授であるブラウン(Devin Brown)である。ブラウンは『ナルニア』に登場する人種の多様性や、物語の中で異なった人種間・種別間(人間とドワーフ等)での婚姻が行われていることなどを指摘している<sup>9</sup>。また、オクスフォ

ード大学シニアフェロー、ヒューストン・バプティスト大学キリスト教弁証学教授のワード(Michael Ward, 1968-)も同様にプルマンらの批判を反証している<sup>10</sup>。

### 2.2 ルイスの生い立ち

ルイスは、ヴィクトリア朝(1837-1901)末期に、ベルファストの事務弁護士の父と牧師の家に生まれ育った母の間に空想好きの次男として誕生した。ルイスは全寮制のパブリックスクールの生活に馴染めず個人教授の下での勉学の後、オクスフォード大学に進学、学位を取得する。第一次世界大戦に従軍後、オクスフォード大学モードリン・コレッジの研究員を経てケンブリッジ大学で教授に就任している<sup>11</sup>。

ちょうどルイスが生まれた翌年に発表されたのが、キプリング(Rudyard Kipling, 1865-1936)の『白人の責務』(*The White Man's Burden: The United States and The Philippine Islands*, 1899)である。帝国主義、植民地政策といった白人による有色人種支配を正当化する作品として大いに賞賛されるような時代であった。また、第一次世界大戦頃までのイギリスは国力に衰えを見せていたものの世界の覇権国家であり、その自負が強い傾向にある。イギリス人の根底に流れる人種観は以下のように考えられる。

曲解を恐れずに言えば、この半ば無意識で、半ば意図的な東洋人に対する順番飛ばしは、イギリス大衆の深層に眠っている、人種差別感に根ざしていると私は睨んでいる。人種差別という言葉が強すぎるというなら、東洋人に対する人種区別と言い換えてもよいが、これはイギリス特有の階層制と、人間中心主義<sup>ヒューマニズム</sup>に由来していると思われる。しかも、この他者への差別感は、イギリス人の国民性を形成している一大要素でもある。

<sup>6</sup> Pullman, P., *The Darkside of Narnia* (*The Guardian*, 1998/10/1) 〈現在 Cumberland Lamp Post <http://www.crlamppost.org/darkside.htm> で閲覧可能。2015/1/20 閲覧〉

<sup>7</sup> “It is blatantly racist.” Ibid. 以降、特に断りがなければ英文和訳は筆者が行っている。

<sup>8</sup> Hensher, P., *Don't Let Your Children Go to Narnia* (*The Independent*, 1998/12/4) 〈<http://www.crlamppost.org/darkside.htm> 2015/5/15 閲覧〉

<sup>9</sup> Brown, D., *Are The Chronicles of Narnia Sexist and Racist?* (the Keynote Address at The 12th Annual Conference of The C. S. Lewis and Inklings Society, Calvin College, March 28, 2009)

〈<http://www.narniaweb.com/resources-links/are-the-chronicles-of-narnia-sexist-and-racist/>〉 (2014/11/20 閲覧)

<sup>10</sup> Ward, M., *Lewis and Pullman* (Mars Hill Review, No. 21, 2003)

<sup>11</sup> 山形, op cit.

一般にイギリス人の有する風格、ときには高慢とも見える物腰や態度からは、「神としての人間」というプライドや、威圧感を感じ取ることができる。西欧の著名なイギリス人論をひもとけば、必ずやイギリス人は、自他ともに神にも等しい存在と認められてきたし、植民地支配に当たっても、アジア・アフリカの人々から畏怖の念をもっと迎えられていたことがうかがえる。

<sup>12</sup> (ルビ原文ママ)

アッパーミドルクラス出身であることや時代背景を鑑みると、ルイスがその時代のイギリス人が一般的に抱いていた他国や人種に対する優越感を持っていたとしても不思議ではない。そこで、繰り返すが、本稿では、彼の人種観を、『ナルニア』第2巻『カスピアン王子のつのぶえ』(*Prince Caspian*, 1951)を中心に、シリーズに登場する NHC を通して検証する。特に『カスピアン王子のつのぶえ』ではドワーフ(Dwarf)の存在が物語に非常に大きな役割を果たす一方で、ルイスの人種に対する観点が表れているからである。

### 3. 『カスピアン王子のつのぶえ』について

#### 3.1 概要

『ナルニア』シリーズの2作目として発表されたが、年代記の時系列順では3番目にあたる物語である。シリーズ1作目でナルニア世界に行き、現実世界に戻った4人の少年少女が再びナルニア世界に戻り冒険をする。あらすじは以下の通りである<sup>13</sup>。

疎開先の家の筆筒を通してナルニア世界に迷い込み、ナルニア国の王・女王として君臨していたペベンシー4兄弟姉妹が現実世界のイギリスに戻って一年。彼らが夏休みを終え寄宿学校に戻る途中、突然なんらかの力が働きナルニア世界に呼び戻される。彼らが戻ったナルニア国は彼らの統治時代から何百

年も経過し、もはやけものや不思議な生き物たちの国ではなく、テルマール人が支配する国となっていた。

テルマール人は圧政を敷き、ものいうけものたちの多くは言葉を失い普通の動物となり、それ以外の者は森の中に身を隠してひっそりと生きていた。国王ミラースはそのような生き物はナルニア国には存在しないと、国民のほとんどはそう信じていた。そのようなナルニア国で、王の甥カスピアン少年は王位継承者として何不自由ない暮らしをしていた。彼が好きだったのは乳母が語ってくれる古い時代のナルニア国の話であった。乳母はこの国がものいうけものや不思議な生き物たちの住む場所だったと彼に教えるが、それがミラースの知るところとなり彼女は王宮から追い出されてしまう。その後やってきた家庭教師のコーネリアス博士は、乳母が彼に語ってくれた話は真実であると告げ、ナルニア国の本当の姿をカスピアンに教えた。実はコーネリアス博士自身がドワーフと人間の混血であった。

国王夫妻に疎んじられながらも、唯一の王位継承者として大切にされていたカスピアンだった。しかし、長らく子宝に恵まれなかった国王夫妻に子どもが誕生すると一転、自分の実子を王位につけることを目論むミラース王から命を狙われる存在になってしまう。実はミラース王は、カスピアンの父王で自分の実兄であるカスピアン9世を殺害し、王位を篡奪していたのであった。カスピアンの身を案じたコーネリアス博士は深夜彼を逃がす。

逃亡中、カスピアンはとうとう古いナルニア国の民たちに出会う。彼らはカスピアンが真の国王だと認め、ミラース王に立ち向かい古のナルニア国を取り戻すために戦うことを決める。しかし、古ナルニア軍は劣勢であった。カスピアンは、コーネリアス博士から宝物としてももらっていたつのぶえを吹く。そのつのぶえは、ペベンシー4兄弟姉妹の長女スーザンが前回ナルニア世界を訪れたときに、サンタクロースからのプレゼントとして受け取ったもので、吹けばどこからか必ず助けがやってくるという言い伝えがあった。

果たして、ペベンシー4兄弟姉妹がナルニア世界に戻ってきたのは、そのつのぶえに呼ばれてのこと

<sup>12</sup> マークス寿子、池田雅之『英国貴族と侍日本: 憧れの国・イギリス、豊かさの国・ニッポン』(PHP 研究所、1993 Google e ブックス電子版)

<sup>13</sup> 使用テキスト: Lewis, C.S., *Prince Caspian*, New York: HarperCollins (1994) 以下引用部分は頁数のみ記す。また、テキストの和訳も筆者が行った。

であった。彼らはアスランとともにカスピアンを助け、ミラースらを倒した。カスピアンは国王に即位し、ナルニア国は元のものというけものや不思議な生き物たちが共存する国に還った。テルマール人は実はペベンシー4 兄弟姉妹らと同様に現実世界からナルニア世界に紛れ込み住み着いた人々の子孫であり、アスランによって元の世界へと戻された。

### 3.2 『カスピアン王子のつのぶえ』の Non-Human Characters

#### 3.2.1 ナルニア国の住民

『カスピアン王子のつのぶえ』(以下 PC と記す)において特徴的なのは、ナルニア国の住民について明確な定義がなされていることである。シリーズ第1作『ライオンと魔女』(*The Lion, the Witch, and the Wardrobe*, 1950) (以下 LLW と記す)では特に詳しく説明されておらず、読者は少年少女たちが出会うキャラクターを通してこの世界はものいうけものやさまざまな不思議な生き物が住み、また人間がまったく住んでいないことを理解する。しかし本作では主人公カスピアン王子に対して家庭教師のコーネリアス博士がこのように明確に説明している。

“Listen,” said the Doctor. “All you have heard about Old Narnia is true. It is not the land of Men. It is the country of Aslan, the country of the Waking Trees and Visible Naiads, of Fauns and Satyrs, of Dwarfs and Giants, of the gods and the Centaurs, of Talking Beasts.” (p.51)

「よくお聞きなされ」博士はいいました。「いにしえのナルニアについて殿下が耳にされたことは真実でございます。この国は人間の国ではございません。この国はアスランの国です。目覚めた樹々や水の精ナイヤード、フォーンやサチュロス、ドワーフや巨人、神々とセントール、そしてものいうけものたちの国なのです」

ここでルイスは、ナルニア国は人間(テルマール人)ではなく、アスランを主とした数々の NHC のものだと明言している。ただし、支配者として統治するのは LLW で予言として繰り返し述べられた

“sons of Adam and daughters of Eve”、アダムの子とイヴの娘、すなわち現実世界からナルニア国にやってきた人間のみである。

#### 3.2.2 『カスピアン王子のつのぶえ』に登場する主な Non-Human Characters

PC に登場する主な NHC は以下の通りである。

- ・トリュフハンター(Trufflehunter、ものいうアナグマ)
- ・トランプキン(Trumpkin、赤ドワーフ)
- ・ニカブリク(Nikabrik、黒ドワーフ)
- ・アスラン(Aslan、ものいうライオン)
- ・リーピチープ(Reepicheep、ものいうネズミ)
- ・コーネリアス博士(Dr. Cornelius、ドワーフと人間の混血)

その他、フォーン、巨人、リス、クマ、樹々の精霊、狼人間、妖婆など。

PC において特徴的なのは、ドワーフに少なくとも二つの種族があるとしていることである。LLW にもドワーフは登場し、Red Dwarf (赤ドワーフ) 族が存在することがフォーンのタムナスの話から判明しているが<sup>14</sup>、その他の種族が存在するのかどうかは不明であった。PC では Red Dwarf (赤ドワーフ) と Black Dwarf (黒ドワーフ) の2種族がシリーズで初めて登場している。黒ドワーフ・赤ドワーフは性質も対照的であり、本稿ではこの2種族の比較を中心に検証する。また、NHC と人間の混血という存在も明らかになっている。この点についてもルイスの人種観の表象として考察する。

### 4. 『カスピアン王子のつのぶえ』の Non-Human Characters に表れるルイスの人種観

#### 4.1 ドワーフ族

Dwarf の定義は、「1a (特に、頭が大きく手足が短い) 小びと. b (おとぎ話に出てくる) 醜い[グロテスクな]小びと. 2 特別に小さい動[植]物, 矮性(わいせい) 植物; 盆栽 (ぼんさい). 3=dwarf star.<sup>15</sup>」である。決して容姿には恵まれているとは言えず、

<sup>14</sup> Lewis, C.S., *The Lion, the Witch, and the Wardrobe*, New York: HarperCollins (1994)

<sup>15</sup> 『新英和大辞典』(研究社、2015 オンライン版)

身体つきも小さい。また、『図説妖精百科事典』によると、ドワーフは岩や洞窟の精霊で、貴石や金属を採掘し、大地やその資源を守る存在とされている。特に黒ドワーフは鍛冶の名工としても知られている<sup>16</sup>。『ナルニア』においても、ペベンシー4 兄弟姉妹らの鎧兜や剣はドワーフたちの手によるものである。

前述の通り、PC では赤ドワーフ、黒ドワーフという2種類のドワーフが登場している。また、ドワーフと人間との混血種の存在も判明する。以下に各々の種族について述べる。

#### 4.1.1 赤ドワーフ・トランプキン

赤ドワーフは、文字通り赤毛で毛むくじゃらである。トランプキンは、叔父のミラース王から逃亡する最中に怪我を負ったカスピアン王子を匿ったNHC 3人<sup>17</sup>のうちの一人である。

非常に現実主義的であるが、情に厚く、また忠義心も持ち合わせている。カスピアンを匿った際、彼をどう処遇するかを相談した際、殺そうと主張した黒ドワーフのニカブリクに対し真っ向から反対をした。カスピアンが正統な王位継承者であることも比較的早い段階で受け入れる。ただ、自分の目で確認しなければ納得が行かない性質で、アスランのことも伝説のひとつだと思っている。

“Oh, as of me,” said the Red Dwarf, who had been listening with complete indifference, “your Majesty knows I think the Horn --- and that bit of broken stone over there --- and your great King Peter --- and your Lion Aslan --- are all eggs in moonshine. It’s all one to me when your Majesty blows the Horn. All I insist on is that the army is told nothing about it. There’s no good raising hopes of magical help which (as I think ) are sure to be disappointed.”  
(p. 96)

「ああ、わしにとっては」無関心を決めこんでことのしだいを聞いていた赤ドワーフは言いました。「陛下もごぞんじのとおり、わしにとっ

てはつのぶえもー そこのひびの入った岩もー一の王ピーターもーライオンのアスランもーぜんぶ言い伝えです。陛下がつのぶえを吹いてもいっしょです。わしがひとつ言えることは、わが軍にはこのことは絶対に言うべきではないということです。魔法のちからで助けてもらえるかも知れないという期待は、まちがいにうらぎられるでしょうから」

しかし、トランプキンは、一旦納得すれば素直に自分の非を認める善良さも持ち合わせている。

彼は、カスピアンが助けを求める伝説のつのぶえを吹いたあと、ナルニア国にやってきたはずの救援者を探しに行くがミラース王の手の者に捉えられてしまう。運良くペベンシー4 兄弟姉妹に命を助けられるが、外見が幼すぎる彼ら<sup>18</sup>が本当に勇猛な戦士として知られた伝説の王・女王であることが受け入れられない。しかし、次男エドモンドに剣で、スーズンに弓矢の対決で破れ、重傷を負っていた肩を魔法の薬で次女で末っ子のルーシィに治療してもらい、ようやく彼らのことを認める。

After that he burst into a great laugh and said, “Well, I’ve made as big a fool of myself as ever a Dwarf did. No offense, I hope? My humble duty to your Majesties all --- humble duty. And thanks for my life, my cure, my breakfast --- and my lesson.”  
(pp. 109-110)

すぐに彼は大きな声でわらいだしました。「わしはドワーフいちの大ばかものです。お気を悪くなさらないでくださいよ。ふつつかながら、陛下がたにおつかえしとうございます。ふつつかながら。それに、わしのいのちをすくってくださったこと、きずを治してくださったこと、朝ごはんをごちそうになったこと、わしの身のほど知らずさをおしえてくださったこと・・・ありがたいことです」

<sup>16</sup> フランクリン、アンナ（井辻朱美監訳）『図説妖精百科事典』（東洋書林、2004年）

<sup>17</sup> あとの二人はアナグマのトリュフハンターと黒ドワーフのニカブリク。

<sup>18</sup> ナルニア世界と現実世界では時間の流れが異なる。また、ナルニア世界で何十年経過しても、現実世界に戻ってくればそれはほんの一瞬のできごととなり、外見も元に戻る。

そしてその後は言葉通りにペベンシー4 兄弟姉妹やカスピアンに仕え、ミラース軍を倒した暁にはカスピアンからライオン騎士団のナイトに任ぜられる。アスランと対面したときも、“‘Son of Earth, shall we be friends?’ asked Aslan.” (p.154) 『『地のむすこよ、ともだちになってもらえるかな』アスランはたずねました。』と、すぐにトランプキンは大変好意的に迎えられる。その他の名前を出てこない赤ドワーフたちも、戦勝後のアスランが催した宴に参加しているので、アスランやカスピアンの味方であったことが窺える。

そして後に出版されたシリーズ4 作目『朝びらき丸 東の海へ』(*The Voyage of Dawn Treader*, 1953) (以下 VDT と記す)、5 作目『銀のいす』(*The Silver Chair*, 1954) (以下 SC と記す) では国王として君臨するカスピアンの摂政という要職を務めている。特に SC では、非常に年老いてすっかり耳が遠くなりながらも摂政としての勤めを果たそうとする忠義心の厚さが描かれている<sup>19</sup>。

#### 4.1.2 黒ドワーフ・ニカブリクとその末裔

一方黒ドワーフもその名が示す通り真っ黒い髪や髭で顔中が覆われている。そのひとりニカブリクは非常に猜疑心が強く、被害者意識を強く持ち、常に不平不満を口にしてしている。前述通りカスピアンを助けた3 人の NHC のひとりだが、3 人の中で唯一彼だけがカスピアンを殺そう提案した。その後も、人間であるカスピアンがいつ裏切るかわからないので、その前に殺害してしまおうと主張するなど、人間に対する憎悪と猜疑心を隠そうともしない。

カスピアンが人間であるどころか、ミラース王の甥と知り、ニカブリクは激怒する。

“Eh?” said Trumpkin. “What's that? What have you been doing, Human, to fall foul of Miraz at your age?”

“He's my uncle,” began Caspian, when Nikabrik jumped up with his hand on his dagger.

“There you are!” he cried. “Not only a Telmarine

but close kin and heir to our greatest enemy. Are you still mad enough to let this creature live?”

He would have stabbed Caspian then and there, if the Badger and Trumpkin had not got in the way and forced him back to his seat and held him down.

(p.68)

「え？」トランプキンは聞き返しました。「なんだって？にんげんさんよ、あんたほどの若さでミラースを怒らせちゃうなんて、いったいなにをしかしたんだい？」

「おじなんです」とカスピアンが打ち明けたとたん、ニカブリクが短剣に手をかけながらとびあがりました。

「ほうらみろ！」かれはさげびました。「テルマール人というだけでなく、われらの最大の敵の近親、さらには世継ぎとは！こやつをまだ生かしておくほど正気をうしなっているのか、おまえたち！」

アナグマとトランプキンがかれをおさえつけて元の席にもどさなければ、おそらくかれはカスピアンのあちらこちらを刺していたことでしょう。

このように、ニカブリクの憎悪の対象は主としてナルニア国を奪った人間（テルマール人）である。そして彼にはナルニア世界の創造主であり、イエスの存在であるアスランでさえ、畏怖の対象になっていない。自分の目で確認していないのでアスランや4 兄弟姉妹の存在に懐疑的なトランプキンと異なり、ニカブリクにとってアスランは、LLW でナルニア国最大の敵であった白い魔女 (White Witch) と同様の存在でしかない。要は、ナルニア国から人間を追い払ってくれるのであればアスランでも白い魔女でも同じなのである。

“Do you believe in Aslan?” said Caspian to Nikabrik.

“I'll believe in anyone or anything,” said Nikabrik, “that'll batter these cursed Telmarine barbarians to pieces or drive them out of Narnia. Anyone or anything, Aslan or the White Witch, do

<sup>19</sup> Lewis, C.S., *The Silver Chair*, New York: HarperCollins (1994)

you understand?”

“Silence, silence,” said Trufflehunter. “You do not know what you are saying. She was a worse enemy than Miraz and all his race.”

“Not to Dwarfs, she wasn’t,” said Nikabrik. (p.77)

「アスランを信じる？」カスピアンがニカブリクに聞きました。

「だれでも、なんでも信じるさ、わしは」ニカブリクはいいました。「あのいまましいテルマールの野蛮人どもをめちゃくちゃにやっつけてくれるのだったら。だれでも、なんでもいいさ。アスランでも白い魔女でも。おわかりか？」

「だまれ、だまれ」トリュフハンターが言いました。「あんたはじぶんがなにを言っているのかわかってないのだ。魔女はミラースやその一族よりもはるかにひどい敵だったんだぞ」

「ドワーフにとっては、そうでもなかったさ」ニカブリクは言いました。

ニカブリクの言う白い魔女とは、前述の通り LLW に登場し、アスランとペベンシー4 兄弟姉妹たちに滅ばされるまでナルニア国を 100 年もの間支配し冬の世界に閉じ込めていた邪悪な存在であった。その頃も NHC たちは虐げられていたが、白い魔女の手下の者たちは支配者側として、そうでない者たちに対して横柄に振舞っていた。ドワーフの一部もそうで、LLW ではドワーフが白い魔女の側近を務めていた。但しこのドワーフの種族については明記されていない。圧政を敷きナルニア国の民のほとんどから忌み嫌われていた白い魔女の死後、彼女の味方についていたドワーフが苦しい立場に置かれたことは想像に難くない。白い魔女のあとに即位したペベンシー4 兄弟姉妹の治世はのちに黄金時代とも呼ばれたほどナルニア国が栄華を誇った時代だった<sup>20</sup>ので、余計に魔女側についていたドワーフは肩身の狭い思

いをしたことであろう。

ニカブリクは殊更（黒）ドワーフが虐げられていることを強く不満に思っている。カスピアンがつのぶえを吹く前にミラース軍の急襲に遭い、カスピアン率いる NHC 軍が手ひどい痛手を負ったときも、ニカブリクは黒ドワーフの被害を強調する。

“I’m not likely to forget it,” came the angry voice, “when my Dwarfs bore the brunt of the attack and one in five of them fell.” (“That’s Nikabrik,” whispered Trumpkin.) (p. 163)

「わしはずっと忘れまいぞ」怒りにみちた声がしました。「わしのドワーフたちが敵のこうげきの矢おもてに立ち、5 人にひとりがたおれたことを」（「あれがニカブリクです」とトランプキンはささやきました。）

ミラース軍の攻撃の犠牲となったのは（黒）ドワーフだけではない。しかしニカブリクは被虐意識が強く、このような発言に繋がっている。

果たしていつまでもつのぶえの効果が現れず、援軍が来ないことに業を煮やしたニカブリクは、とうとう邪悪な妖婆と狼人間を仲間に入れ、死者を呼び出す術を使って白い魔女を生き返らせようとした。すんでのところ、カスピアンやようやく到着したピーター、エドモンドたちによって3 人とも殺される。

妖婆ら邪悪な存在と近い黒ドワーフは、ニカブリクだけではない。カスピアンがはじめてさまざまな NHC に出会いミラース王と対抗する援軍を求め中、ニカブリクとは別の5 人の黒ドワーフたちと対面する。

A little farther on, in a dry, rocky ravine they reached the cave of five Black Dwarfs. They looked suspiciously at Caspian, but in the end the eldest of them said, “If he is against Miraz, we’ll have him for King.” And the next oldest said, “Shall we go farther up for you, up to the crags? There’s an Ogre or two and a Hag that we could introduce you to, up there.” (p.76)

<sup>20</sup> “...in the Golden Age when Peter was High King in Narnia and his brother and his two sisters were King and Queens under him.” Lewis, C.S., *The Horse and His Boy* New York: HarperCollins (1994)

また少しのぼると、かわいた岩だらけの谷あいに、5 人の黒ドワーフの住むほらあながありました。かれらはうたがわしげにカスピアンを見つめました、やがていちばん年かさのドワーフがこう言いました。「もしこのひとがミラースに立ちむかうのであれば、かれを王といたしましょう。」そしてつぎに年かさのドワーフが、「もうすこし上までのぼってきましょうかい？ 鬼のいっぴきやにひき、それに妖婆がすんでますでの。ごしょうかいしましょう。」

この申し出をカスピアンたちは辞退した。アスランを信奉する NHC にとっても、鬼や妖婆らは忌み嫌われているようで、黒ドワーフたちの洞窟を出た後アナグマのトリュフハンターは、“‘We should not have Aslan for friend if we brought in *that* rabble’” (p. 77) (斜字体原文ママ) 『『ああいったやからをなかまにひき入れようもんなら、アスランに友とみとめてもらえなくなるさ』』とあからさまに不快感を示している。トリュフハンターの言葉はのちに正しいことが証明される。カスピアンとペベンシー4 兄弟姉妹率いる NHC 軍がミラース軍に勝利することが明白となってアスランが姿を見せた際、黒ドワーフたちはこのような反応を示す。“Some of the Black Dwarfs, who had been of Nikabrik's party, began to edge away.” (p.205) 「ニカブリクのなかまだった黒ドワーフのなかには、その場からにげだしはじめるものもありました。」鬼や妖婆らと近い黒ドワーフは、アスランを友、もしくは崇拝の対象と見なせず、勝利の喜びを皆と分かち合えずその場を去るのである。

黒ドワーフたちの末裔は、シリーズ最終巻『さいごの戦い』(*The Last Battle*, 1956) (以下 *LB*) でナルニア最後の王ティリアン（カスピアンの子孫）たちの説得に耳を貸さず、ナルニア国を敵国カロールメンから護る戦いに加わろうとしない。それどころか、アスランを否定し、ドワーフはこれ以上誰にも従属しないことも宣言する。そしてドワーフたちはものいう馬に弓を射、カロールメン軍にも弓を向け、その言葉を実践する。やがてドワーフたちは、明るい場所でも目が見えず、スマイルの芳香も馬の排泄物の

匂いにしか感じず、アスランが魔法で出したごちそうも寝藁や古びた蕪にしか思えなくなってしまう。そして互いが自分よりもいいものを食べていると思ひ込み、諍いが起こってしまう。アスランや他者の助けを受け入れなくなってしまう黒ドワーフたちは、アスランの〈まことのナルニア〉には行かれず、古のナルニア世界滅亡とともに滅びる。<sup>21</sup>

このように、『ナルニア』の黒ドワーフたちは常に自分たちの利を計算高く優先し、結局は自滅する傾向にある。

赤ドワーフと黒ドワーフの決定的な違いはどこにあるのだろうか。両者共猜疑心が強く、著しく現実主義的であるという共通点がある。但し、トランプキンをはじめとする赤ドワーフは例え最初は疑っていてもその事実をつきつけられればきちんとそれを受け入れ、自分の非があれば認めることができる。一方で、黒ドワーフは事実を見せられても信用せず、やがては目の前にあるものも見えず、聞こえず、匂えず、触れられず、味わえず、破滅のときを迎える。ルイスは子どもたちに、排他主義や狭量さが招く恐ろしさを伝えているのである。

## 5 ルイスの真の人種観

### 5.1 〈黒〉は悪か

これまで見てきた通り、ルイスは〈黒〉ドワーフを功利的で目的のために手段を選ばず、味方を裏切ることも平気な種族として描いている。また、ナルニア国の敵国であるカロールメン国の民は肌が〈浅黒〉く、髪の毛の色も〈黒〉い。プルマンは特にルイスがカロールメン人がイスラム民族を揶揄していると強く批判した<sup>22</sup>。例えば *LB* で黒ドワーフがカロールメン人を “darkie” (黒人) と呼ぶシーンが合計 5 回あり<sup>23</sup>、ルイス擁護派でさえ子どもたちに読み聞かせをする際に、その言葉を避けたと告白している<sup>24</sup>。

<sup>21</sup> Lewis, C.S. *The Last Battle*, New York: HarperCollins (1994)

<sup>22</sup> Pullman, op cit.

<sup>23</sup> *LB* pp.118, 126, 137 (2 回), 144

<sup>24</sup> Easterbrook, G., In Defense of C.S. Lewis (the Atlantic 2001/10)

(<http://www.theatlantic.com/magazine/archive/2001/10/in>

確かに主人公の少年少女たちは白人であり、ナルニア国と友好国アーケンランドの白人支配に対してカロールメン国は有色人種の国と描写されている。これだけを切り取るとルイスは 20 世紀前半のイギリス人に一般的な他民族（特に植民地の有色人種）に対する偏見を持つように感じられる。

しかし、ブラウンは、『馬と少年』でアーケンランドの王子だと判明したシャスタ少年（白人）はのちにカロールメン貴族の娘アラヴィス（有色人種）を妃として迎えたことを指摘する<sup>25</sup>。またカロールメン人はアスランではなくタシ神を中心とした多神教の宗教を信仰しているが、異教徒であっても厚い信仰心と清らかな心を持つエーメス(Emeth)は、〈まことのナルニア〉に入ることをアスランに赦されることも指摘している<sup>26</sup>。逆にナルニア国に圧政を敷いていた白人のテルマール人はどうだろうか。ミラーズ王らは殺され、残留を希望する者以外はアスランによってナルニア世界から追放される<sup>27</sup>。

NHC に限定しても、真っ白い顔の〈白〉い魔女はアスランによって滅ぼされている<sup>28</sup>。更に、SC に登場する魔女・緑衣の貴婦人(Lady of the Green Kirtle)も肌の色は白い美女だが敵役として描かれている<sup>29</sup>。

前項で取り上げた黒ドワーフは、その色のせいで破滅したのではない。あくまでも個々のキャラクターの性格付けの一環で、特徴を大袈裟に強調する傾向はあるが、ルイスは決して肌の色や宗教で差別しているのではないのである。

## 5.2 混血

『カスピアン王子のつのおえ』には、ドワーフと人間の間に生まれた者も登場する。それがカスピアン王子の乳母、そして家庭教師のコーネリアス博士である。彼らは NHC の国だったナルニアと、今のナルニア国を繋ぐミッシング・リンク的な存在で、カスピアンに NHC やナルニア国の歴史について語

り聞かせる。

ブラウンも指摘しているが<sup>30</sup>、そのような混血に対して強烈な拒否反応を示すのがニカブリクである。排他的思想を隠そうともしない彼は、きつい口調でコーネリアス博士を罵る。カスピアンから身の上話を聞いたときには、“‘And it's all mixed up with that Tutor: a renegade Dwarf. I hate 'em. I hate 'em worse than the Humans.’” (p.69) 『その家庭教師というやからが話をぜんぶややこしくしちまいやがった！ドワーフのうらざりものめ！わしはやつらが大きらいだ。人間よりも大きらいだ』と罵倒し、コーネリアス博士に対しても直接 “‘A renegade Dwarf. A half-and-half! Shall I pass my sword through its throat?’” (p. 88) 『ドワーフのうらざりもの。どっちつかずのできそこないめ！そやつののを、わしの剣でかき切ってやろうか？』と憎しみを露わにする。

ニカブリクから排他的で被害者意識の強い者たちは、自分たちを虐げている人間の血とドワーフ族の血が混じり合うことがどうしても許せないのだ。

## 5.3 ルイスの視点

では、このように混血を詰る強い言葉を使わせるルイスは、やはり混血に対して嫌悪感を抱いているのであろうか。

コーネリウス博士はカスピアンにもっとも大事な友人<sup>31</sup>と呼ばれ、彼が即位した直後に大法官に任ぜられている<sup>32</sup>。ミラーズ王に追放されていた乳母も PC 第 14 章でカスピアンとよろこびの再会を果たす<sup>33</sup>。

また、カスピアンは VDT で出会った NHC の星びとラマンドゥ(Ramandu)の娘リリアンディル(Lilliandil)と結婚し、後に玉座に就く息子リリアン(Rilian)を設けた。すなわち、カスピアンは NHC の血を引く者を妻に娶り、その子孫は人間と NHC との混血ということになる。ナルニア国最後の王ティリアンもカスピアンの子孫であるため、リリアン以降代々ナルニア国の王は例えわずかでも NHC の血

-defense-of-c-s-lewis/302301/ 2015/5/15 閲覧)

<sup>25</sup> Brown, op cit.

<sup>26</sup> Brown, Ibid.

<sup>27</sup> PC 最終章で、彼らはアスランが開いた回廊を通り、父祖の地である現実世界に〈帰る〉。

<sup>28</sup> Lewis, LLW

<sup>29</sup> Lewis, C.S., *The Magician's Nephew*, New York: HarperCollins (1994)

<sup>30</sup> Brown, op cit.

<sup>31</sup> “‘my greatest friend and the savior of my life’” 「私のいちばんの友人であり、命のすくいぬしだ」 (p. 88)

<sup>32</sup> Ibid. (p.210)

<sup>33</sup> PC (p. 204)

を引いた人物である。

もしルイスが人種や混血に対する強い偏見や差別的感情があったとすれば、このような筋書きや設定はありえないだろう。

何よりも、ルイスの人種に対する観念は、赤ドワーフ・トランプキンがコーネリアス博士を罵倒するニカブリクに対して放ったこのセリフに集約されている。“*“The creature can’t help its ancestry.”*” (p. 88)

『「だれもうまれは選べないものだよ。』』このセリフを 20 世紀半ばのまだ人種差別が根強く残っている時代に、しかも被虐者たるドワーフに言わせたことはルイスの人種観が非常に進歩的であると言える。

## 6. おわりに

ルイスが有色人種やイスラム圏に対する偏見を持っていたことは、21 世紀の基準を当てはめてみれば否定はできない。しかしながら、その偏見はルイスが生きた時代を考えれば飛び抜けて強い訳ではない。むしろ、それ以上に読者である少年少女たちが偏見や差別思考を持たないように仕向けるべく、セリフやプロットに工夫を凝らしている。

主に旧植民地を中心に移民政策を採っていたイギリスは、今では人口の約 10%が混血を含む白人以外のエスニック・グループで占められている<sup>34</sup>。そのような時代において、少年少女たちはニカブリクの言動によって人種偏見の醜さを学ぶことができるのである。

残念ながらイギリス以外にも、日本を含めて世界中でエスニシティに基づく偏見・差別は後を絶たない。ルイスがトランプキンの口を借りて語った「だれもうまれは選べない」を肝に銘じ、出自ではなくその人自身の人となりで判断することを我々は怠ってはならない。

(Received: May 31, 2015)

(Issued in internet Edition: July 1, 2015)

<sup>34</sup> 下楠昌哉 (編) 『イギリス文化入門』三修社 (2010) (p. 341-343)